

■リヤードフ/交響詩《魔法にかけられた湖》Op. 6 2

ドイツのバッハ一族、オランダのアンダーセン一家など、音楽史には有名な音楽家の家系がある。ロシアのペテルブルクに住んでいたリヤードフ一家もそのひとつ。指揮者ニコライの子どもは7人全員が音楽家となり、孫のアナトーリイ・コンスタンチーノヴィチ・リヤードフ（1855～1914）も幼いころから音楽に親しんだ。だが、この一族、生活は不規則だし仕事はずぼらだと、みんな悪名が高かったという。リヤードフも音楽院在学中、出席が悪くて一度は退学の憂き目にあい、作曲の締め切りも守れなかった。ロシア・バレエ団のディアギレフが新作バレエ《火の鳥》の音楽をリヤードフに依頼したのにずうっと着手しなかったので、新人のストラヴィンスキーに乗り換えた話は有名である。

そんなわけで、リヤードフの曲で楽譜が出版されたものは少なかった。しかも、彼は自作の評価に厳しく、満足のいく作品しか、世に問わなかった。交響詩《魔法にかけられた湖》は彼自身も納得し、聴衆の人気も獲得した数少ない曲である。《キキモラ》や《バーバー・ヤガー》と同じく、ロシアのおとぎ話に基づく描写的な音楽。師のリムスキー・コルサコフゆずりの色彩的な管弦楽法によって情景を繊細に描き、独特の和声法によってファンタジックな性格を強調。ロシアの人々はこの交響詩を聴いて、秘境の湖をまざまざと思い浮かべたことだろう。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート3、オーボエ2、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、ティンパニ、バスドラム、チェレスタ、ハープ、弦五部

※スコア上の表記